

## 土地の話（6） 「労働生産性と土地生産性」 或いは「エーカーの無駄話」

築瀬範彦

### 1. はじめに

古い話をすれば、約1万年前に「農業革命」が始まり、人類は定住し、農業を営むようになったのだそう。それ以前の狩猟採集経済の段階から、農業生産によって生きる時代になったということで、余剰生産物がどうたらこうたら、神様やら支配階級やら、ややこしいものが発明されて云々・・・、とくれば、歴史の授業だが、そういう難しい話は置いておいて、土地にまつわるコネタである。

「苦労して耕した土地だから、これは俺の土地だ！」と主張するものが現れ、周囲も「そりゃ、そうだろう・・・」と同意して、この頃に耕作権や所有権の原型が発明されたのだろうと勝手に想像する。するとそのうちに、きっと土地の面積を測る単位が必要になっただろう。

しかし、農地である。価値は、穀物の取れ高にある。現在のように抽象的に何ヘクタールと計測した訳ではあるまい。古代では、土地の価値を反映しない面積は余り意味がなかったに違いない。「痩せた土地1町歩と肥えた土地1町歩が同じ価値」などと言えば、今日でも農家の人は納得しないだろう。農業とは基本的に土を作ることだと聞いたこともある。

### 2. 日本古代の「代（シロ）」

さて、日本の古代、それも「大化の改新」などの前の古墳やら埴輪の時代のことである。日本中に2万とか3万の古墳があるのだそう。女王卑弥呼の時代から、何百年もかけて作ったのだが、凄いものである。我等が国土は、よほど米が採れる豊かな大地だったのだろう。

その頃の土地の単位は、「代（シロ）」だったのだそうである。この体系は、大化改新（西暦645年）により、中国の度量衡体系を導入する前のものであり、厳密には面積の単位とは言えないかもしれない。何故なら、一束の稲（穂刈りした稲の20束が1石（180リットル）に相当）を得ることのできる田圃の広さを「1代」としたからだ。痩せた田の1代は広く、肥えた田の1代は狭かつ

た。むしろ、土地の生産力を単位としたと言うべきだろう。

それだけなら、「ホーツ」で終わってしまうが、世界の他の地域まで話を広げると意外に面白いものが見つかったのである。

### 2. イングランドのエーカー

イギリスの面積単位「acre（エーカー）」が、実に「代（シロ）」と似ていたのである。

よく知られているように「1エーカー(acre) = 4840yd<sup>2</sup> = 4046.86m<sup>2</sup>」である。語源は、牛の頸木（くびき:鋤を引くための道具）を意味するギリシャ語だそう。雄牛2頭引きの鋤を使って、1日で耕すことのできる面積、これが1エーカーなのだそうである。

もちろん、土地の条件によって面積は異なる。固い地盤の土地ならば、耕しやすい土地に比べて、1エーカーは小さいだろう。古代日本の「シロ」が、「生産高換算面積」であるのに対して、「エーカー」は、「労働力換算面積」だったのである。

それでは困ることも多かったのだろう。13世紀のイングランド国王エドワード1世(在位1272～1307)が、法定面積単位 (statute acre) としての「エーカー」を決めたのだそうである。内容は、「4ポール×40ポールを1エーカー」としたものであった。

「ポール (pole)」は、「ロッド (rod)」や「パーチ (perch)」とも呼ばれ、5.5ヤードの相当(約5メートル)の長さであるから、「20メートル×200メートル」で凡そ、4000平方メートルとなったのである。

ところが、ポールとは畝（うね）の長さだったそうである。当時のイギリスの畝(furrow)の長さ(long)は、40ポールが基本であり、これは、「1ファーロング(furlong)」とも呼ばれたらしい。また、4ポールには、32の畝をつくることのできたのだそうだから、1ポールには8畝ができたことになる。

どこまで行っても、耕作する労働の量が元になっているように感じるのは筆者だけだろうか。

### 3. 産業革命と勤勉革命

そこで話は更に飛躍する。昨今、高名な経済史家の川勝平太教授の作品に、「産業革命」と「勤勉革命」というフレーズが出てきた。

産業革命は18世紀のイギリスに発祥した「industrial revolution」のことであることは説明するまでもないが、勤勉革命は日本史家の速水融慶応大学名誉教授の発明した概念で、徳川期の日本の農業を分析した結果、そこには、土地生産性を極限まで増大させた「industrious revolution」ともいべき農業生産性の革命的進歩が見られるのだそうである。

以下、少々乱暴に要約する。

少ない人口で森を切り開き、馬や牛の畜力を使って土地を耕した西欧社会は、新大陸を「発見」し、その広大な「無人の」土地から生産を上げるために、徹底的に労働生産性の高い農業を指向した。その結果として、大規模な土地所有と機械化により商品作物を大量に作る北米や南米、豪州の農業が生まれた。いわば、土地は無尽蔵だったのである。限界のある人間の労働力を如何に効率的に活用するかが問題であった。

一方、土地資源が制約された江戸時代の日本では、相対的に有利であった労働人口を単位面積当たりの耕作地に徹底的に投入し、土地の生産力を限界まで高める農業を発明したというのが、速水教授の学説である。勤勉に働いて豊かな生活を目指す日本人の基本的な生活態度が、勤勉革命の結果生まれたと言うのである。

川勝理論は、この理論を発展させ、「物産複合」という概念に到達している。江戸時代の「暴れん坊將軍」吉宗の頃に、諸国の物産を総点検し、中国渡来の本草学の知識を日本に適合し、諸般の物産開発を促進させた。お茶や醤油や全国の名産物がこの頃どんどん生まれた……。こういう下地があったから、明治維新後の急速な西欧キャッチアップが可能だったというところまで話は発展するのである。

最近の日本史の研究では、江戸時代は結構、豊かな社会であり、農民から絞り取るだけ絞り取る「苛斂誅求(かれんちゅうきゅう)」な政治が行われていたわけではないという学説がメジャーになりつつあるようだ。「何でも鑑定団」に出品される地方のお宝は、豊かな江戸文化の証明であり、それを支えるには、それなりの生産力があつたに違

いないと筆者のような門外漢も納得してしまう。

ついでに言えば、検地帳記載の石高は、「生産高」ではなく、実は「年貢高」だったという説も日本史の世界ではメジャーになりつつあるらしい。何とか村の表高500石が生産高なら、五公五民の年貢では、農民には250石しか残らないが、これが年貢高なら、農民には500石が残されていることになる。食うや食わずが、結構、豊かな暮らしになる。徴税側というか御領主様にとって興味のあるのは、年貢高だし、意外に本当かもしれないと思ってしまうのである。

### 4. おわりに

最後になるが、ヤードポンド法はややこしい。「1エーカーは、4840平方ヤード」であり、この換算単位を覚えておかないと何かと不便な国で仕事をした経験もある。

また、学生時代に測量学で「チェーン」という単位も習ったが、因みに、「1チェーンは4ポール」である。1ヤードの今の長さに決まったのは、1824年の度量衡法の制定だそう。それまでは、地方により、いろいろなヤードがあったようで、これまた、イングランド王ヘンリー1世(在位1100~1135年)が、自分の腕を突き出したときの鼻の先から親指の先までを1ヤードにする法令を出したのが最初だったという(腰周りという説もある)。

しかし、「1ヤードが0.9114メートル」ということは、ご存知の方が多いかも知れない。ドライバーで250ヤードは飛ばしたいとか……。

星田直彦著 「単位171の新知識」 講談社

BLUEBACKS 2005年

川勝平太著 「日本文明と近代西洋」 NHK ブックス 1991年

松岡正剛 「松岡正剛の千夜千冊」第225夜

<http://www.isis.ne.jp>

山本博文監修 「ビジュアル NIPPON 江戸時代」 小学館 2006年